【パキスタン洪水災害救援】

検査部臨床検査技師兼国際医療救援部　喜田たろう

洪水災害に対する救援活動は、地震等とは異なり被災地の医療施設の復旧も早いため、被災者の移動に合わせて、医療ニーズを見極める必要があります。今回の活動では、被害の進行や避難民の動きに合わせて、インダス川の上流から下流へと移動しながら活動を続けることになりました。

インダス川下流に位置するシンド州では、堤防の決壊により大きな湖が生じ、多くの町が未だ水に沈んでいました。急ごしらえの堤防沿いに作られたキャンプでは、千人規模の避難民の人々が暮らし、ほとんど何の支援も得ていない状況でした。また多くの医療施設は水に沈んだままで、地域の医療サービスは、増加した人口に対応できない状態にありました。我々はパキスタン赤新月社を通じて、現地の医師、看護師らと医療機関や避難民キャンプでの診療活動を行いました。さらにスウェーデン、スペイン、ベネルクス、ドイツ、デンマークの各国赤十字社も、給水・衛生、救援物資配布、こころのケアなどの継続的な支援活動を行っていました。

©日本赤十字社

（洪水によりアクセスが途絶え、生活基盤を失った被災者）

©IFRC

（避難民キャンプを訪問し、医療ニーズを調査する喜田検査技師）

今回、日赤要員のチームリーダー、合同派遣チーム全体の副チームリーダーとして、フランス赤十字社と日赤要員との橋渡し、国際赤十字や他のＥＲＵチームを含む関係団体との連絡調整、危機管理、メディア対応などを担当しました。これまでの活動支援業務とは異なり、事業そのものに携わる中で、避難民キャンプや現地医療施設の調査等にも関与することができ、個人としても非常に学びの多い派遣となりました。